

くらしのすまいりんぐ

地球と人に優しい家づくり・くらしづくりの情報広場

2025 年 6 月吉日発行
発行責任者：猪野工務店
〒781-8008
高知市潮新町 1 丁目 14-9

<今月の話>

1. 今月の話題 ―夏のヒートショックにもご注意を―
2. なぜ売れる？―マーケティングを知れば、選ぶ力が手に入る ―
3. 夢が詰まった本の世界へ ―父の日、母の日―
4. 建築知識 ―能登半島地震―
5. 辛口コラム ―世界競争ランキング、38 位に転落―



今月の話題

熱中症だけじゃない！ 夏のヒートショックにもご注意を

これからの季節、熱中症のニュースを目にする機会が増えます。熱中症対策は万全という方は多いと思いますが、冬の話だと考える人が多い「ヒートショック」も実は注意が必要です。

暑い屋外から帰宅し、冷えた室内に入った瞬間にめまいや吐き気を感じたことはありませんか？ それが、「夏のヒートショック」かもしれないのです。



ヒートショックとは、急激な温度変化によって体が受けるストレスのこと。冬場には、暖かい室内から寒い脱衣所やトイレに移動する際などに起こりやすいとされていますが、夏にも同じようなリスクがあります。特に、強い日差しや蒸し暑い屋外から冷房の効いた部屋に入った瞬間など、血圧が急変し、体調を崩すことがあります。また、高齢者は体温や暑さの変化を感じにくくなる傾向があるため、徐々に暑くなる室内で熱中症になることがあります。ヒートショックだけでなく、こうした隠れたリスクにも注意が必要です。

夏の健康管理のためには、以下のような対策を意識しましょう。

- 冷房の設定温度は 26～28℃ を目安に。室内外の温度差を極端にしない
- 湿度は 40～60% を保つと快適で、熱中症リスクも軽減
- 帰宅後すぐに冷えた部屋に入る場合は、扇風機や弱冷房で徐々に体を冷やす工夫を
- 外出時は、帽子や日傘で直射日光を避け、こまめな水分補給を心がける

快適な住環境づくりが、健康を守る第一歩です。これからの季節は、「冷やしすぎ」や「急な温度変化」、そして「暑さに気づいていない」ことにも気をつけましょう。



【なぜ売れる？】 -マーケティングを知れば、選ぶ力が手に入る-

マーケティングの本が本屋のランキングコーナーに並ぶのは、多くの人が「なぜこれが人気なのか」「どうして自分はこれを選んでしまうのか」といった日常の素朴な疑問を持ち、その仕組みを知りたいと感じているからでしょうか。実際、私たちが何気なく手に取る商品や、SNS で話題になるもの、心に残る CM やキャッチコピーの裏側には、人の心を動かす巧みな工夫やアイデアが詰まっています。マーケティングを学ぶことで、普段見ている世界が少し違って見えるようになるのです。

ミシュランガイドの誕生秘話

タイヤメーカー・ミシュランは 20 世紀初頭、「人々にもっと車で旅をしてもらい、タイヤを消耗してもらう」ことを狙い、修理工場やホテル、レストランの情報をまとめたガイドブックを無料で配布しました。やがてレストラン評価が加わり、現在では世界的なグルメガイドとして知られる存在となりました。一見関係なさそうな「タイヤ」と「グルメ」を結びつけたこの発想は、消費者の「美味しいもののためなら遠出したい」というインサイトを巧みに捉えた、マーケティングの傑作です。

大戸屋の女性向け店舗戦略

飲食チェーン大戸屋が「一人で外食したい女性」に着目し、目立たない立地や店内デザインを工夫したことで、女性客の集客に成功した例もあります。これは「誰が、何を、どうして欲しいと思っているか？」という視点でマーケティングを考え直した結果、既存の商品やサービスにも新しい価値を生み出せることを示しています。

誰が（消費者）：一人でも気軽に外食したい女性が

何を：人目を気にせず和定食を

どうして欲しいと思っているか：安心して利用したい

マーケティングを学ぶと、「これは誰が、私に何をしてほしいと思っているのか？」と考える力がつきます。売り手の意図が見えるようになり、無意識に流されずに自分で選べるようになるんです。

逆に、「誰かの困りごとはどう応えるか？」という視点も持てるので、ただの売り込みではなく、本当に役立つ商品やサービスを考えられるようになります。

つまり、マーケティングはビジネスの武器になるだけでなく、日常をちょっと面白くしてくれる知恵でもあるんです。人との関係を見つめ直すヒントにもなるかもしれません。たとえば親子や職場、友人とのやりとりでも、「この人は何を求めているのか」と想像する視点は、信頼を育む助けになります。

でも、自分を犠牲にしすぎないように。それもまた大切な視点です。



【夢が詰まった本の世界へ】 —父の日・母の日—

父の日と母の日に関する絵本をまとめました。

お父さん、お母さんと過ごす時間が、もっと大切に思える絵本たちです。

— おとうさんだいすき —



「ぼくのおとうさんはね・・・」森の朝は、どうぶつの子どもたちの自慢話でにぎやか。でもこぐまだけはションボリ。父と子の心の交流をやさしく温かく描く物語絵本。

また、絵本には自転車や車、気球、飛行機、巨大客船など、さまざまなクラシックな乗り物が登場し、乗り物好きの子どもにもぴったりで。

文研出版

司修 作・文・絵

— ぼくとおかあさん —



自然の中で交わされる、やんちゃな子ぐまと、おおらかな母ぐまのほほえましい交流。

子どもがどんな「いい子」でも「いけない子」でも、お母さんにとってはかけがえのない存在であることが伝わってきます。親子の愛情や家族の大切さを改めて感じさせてくれる一冊です。

出版社 くもん出版

文・絵 宮本忠夫

父の日が近づいてきましたね。普段はなかなか言えない「ありがとう」も、この日なら少し素直に伝えられそうな気がします。

父の日の始まりは、アメリカのソノラ・スマート・ドッドさんが、「母の日があるなら父にも感謝を伝えたい」と願ったことがきっかけでした。男手ひとつで育ててくれた父親への思いを胸に、彼女は1909年に牧師協会へ父の日の制定を願い出たのだそうです。そして翌年、父の誕生月である6月に、初めて父の日が祝われました。今では世界中で、父に感謝する日として大切にされています。

今年の父の日は、お父さんやお母さんと思い出を語り合ったり、一緒に食事を楽しんだりしてみませんか。ちょっとしたプレゼントや言葉でも、きっとお父さん、お母さんは喜んでくれるはずです。あなたの気持ちが、まっすぐ伝わる一日になりますように。



建築知識

能登半島地震

2024年1月1日、M7.6の能登半島地震は木造住宅に1～2秒周期の揺れで、住家の損害は16万戸、内全半壊が約3万戸に及びました。昔風の畳の広間を好む土地柄でもあり、経済的に豊かな地方ではなく、過疎化し高齢者が多いために、耐震補強も進んでいませんでした。81年の建築基準以前の建物では全半壊が5割余に及び、柱梁の結合厳格化の2000年基準後の全半壊が1割未満だったのにそれ以前では3割に上ったとのこと。基準法改定の効果が表れたようです。地盤の変動も酷く、隆起のため船が入れなくなった港もあり、インフラの復旧が遅れました。大災害の際、国が主体になって対応することになっていない法制は問題で、避難所の劣悪さは目を覆うと毎度感じます。この地震でもせっかく生き延びながらその後に災害関連死が数百人でたそうです。国に事前登録され訓練を受けたボランティアが30万人、国が彼らを支援するのが法で規定され、出動の旅費は国の負担、人が抜けた企業には国から補助という手厚いイタリアの支援の訓練をNHKが取材し、その質の高さを報じています。食・眠・排便を最重要視し、テントやトイレなど避難所の資材は国が中心となって全国の拠点に保管、資材は250人ごとに80セット準備されています。立派な厨房車には専用トイレもあり、災害2日目からはレストラン級の食事、記者も味に感激したようです。



<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240801/k10014528791000.html>

辛口コラム

世界競争ランキング 38 位に転落

スイスのビジネススクール IMD が毎年発表する世界競争ランキングで 1982-92 年連続世界一位だった日本が 24 年には 38 位に落ちたと、一橋大名誉教授野口由紀夫悠紀雄氏が警告しています。アジアで日本より下はインド、フィリピン、モンゴルだけ。「経済パフォーマンス」、「インフラストラクチャー」、「政府の効率性」、「ビジネスの効率性」の 4 要因を 336 の指標で評価しており、「政府の効率性」、「ビジネスの効率性」特に評価が悪いそうです。IMD は世界人材ランキングも出しており、シンガポールが世界 8 位、香港 16 位、台湾 20 位、マレーシア 33 位、韓国 34 位に対し日本は 43 位です。日本人は優秀だったイメージがあります。これには 3 分野があり、1 は教育への公的支出、教師の数など「人材投資と開発」(第 36 位)、2 は生活費、頭脳流出、生活の質などの「魅力」(23 位)、3 は労働力の成長率、専門家、金融の技術、語学能力、大学教育、など、国際的経験、シニアマネージャーの能力 (58 位) 等で、特に「国際的な経験」(64 位)、「シニアマネージャーの能力」(62 位)、「語学の能力」(60 位) で「国際的な経験」に至っては世界最低です。

6 年も英語を学んで会話もできないのは文部省の欠陥か、それとも鎖国政策の成功でしょうか。海外で高齢者の団体旅行は見かけますが若者が混ざっているのは日本人だけです。人口が 2 / 3 しかない韓国の留学生数は日本の 4 倍。こうした内向き志向が、世界の流れの変化への遅れに繋がってきた可能性を野口先生が指摘するのはもっともな話です。

